

【原 著】

養育者の子育てにおける「歌う行為」の可能性
－ 3名の母親を中心に－

早川 倫子 片山 美香

The potential of “singing activities” in child-rearing facilitated by caregivers:
A focus on three mothers

Rinko HAYAKAWA, Mika KATAYAMA

2020

岡山大学教師教育開発センター紀要 第10号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.10, March 2020

養育者の子育てにおける「歌う行為」の可能性

- 3名の母親を中心に -

早川 倫子※1 片山 美香※1

本研究は、養育者の子育てにおける「歌う行為」に着目し、養育者の立場からその可能性について検討することを目的とした。パイロットスタディとして実施した3名の子育て中の母親への質問紙調査およびグループインタビュー調査を通して、母親の「歌う行為」の様相を探り、子育てにおける有用性について検討した。

その結果、「歌う行為」には、子どもがある行動をとることへの意欲を高めたり、否定的な気持ちを好転させたりする感情の切り替え手段としての有用性のあることが示唆された。言葉だけで伝えるよりも、子どもが好きな歌や多様な音声表現を用いた方が、子どもに受け入れられやすいこと、音楽的な特性自体が子どもの感情に響きやすいことも示された。また、「歌う行為」には、了解可能なメッセージを共有し、親子が楽しく養育行動を進める触媒と成り得る可能性が見出された。

キーワード：歌う行為, 養育者, 子育て, 質問紙調査, グループインタビュー調査

※1 岡山大学大学院教育学研究科

I はじめに

平成29年版の「男女共同参画白書」によると、これまで4割前後で推移してきた第1子出産前後に女性が就業を継続する割合が約5割へと上昇した。特に、育児休業を取得して就業継続した女性の割合は、昭和60年～平成元年の5.7%(第1子出産前有識者に占める割合は9.3%)から28.3%(同39.2%)へと大きく上昇した。このように、子育てと仕事を両立する女性は増加の一途を辿っている。限られた子どもと過ごす時間をどのように質の高いものにするかは、子育てをしながら就労する女性にとって葛藤を伴う課題であろう。

そこで、本稿では、子育てにおける「歌う行為」の可能性に着目した。なぜなら、これまでも「歌う行為」は子育てと親和性が高く、子守歌に代表されるように、広く認められる育児行為と言えるからである。また、子守歌は乳児のように比較的年齢の低い子どもが対象となることが多い一方、母親の声で子どもに「歌いかける」という行為は、特に子どもの年齢を問わず、大きな意味を持つことが指摘されている(吉永・無藤, 2012)。そのため、本稿では母親の声で子どもに「歌いかける」行為を子守歌に限定せず、「歌う行為」として取り上げることとする。

子育てにおける「歌う行為」に関するこれまでの先行研究には、「子守歌」や「歌いかけ」に関するいくつかの研究があるが、乳幼児をはじめとした子どもの音楽的な発達、情緒や言語の発達といった視点など、「歌う行為」を受ける子

ども側の機能や効果から示されてきたものが多い。一方、諸岡・小花和(2016)の「歌いかけ」の研究は、歌いかけの頻度と育児の自己効力感の関係について量的分析を試みているが、本研究が目指すような「歌う行為」の様相や特徴の質的な分析から養育者にとっての機能を明らかにしたものではない。

近年の発達科学においては、「共鳴・共感」(佐伯 2007)や「コミュニケーション的音楽性(communicative musicality)」(Malloch & Trevarthen 2008)という視点から、子どもと養育者の双方向の関係性の中で、音声表現の本質が問い直されている(今川他 2016)。また、対乳児発話(マザリーズ)についての研究では、これまでに乳幼児の言語発達や心身の発達において意味ある音声だということが示されてきたが、近年の脳科学研究ではマザリーズを発する側(特に母親)の左脳・言語野の脳活動が活性化することが示されてきており(松田 2014)、養育者側への効果という点から注目に値する。

そこで、本研究ではこうした動向も踏まえて、子育てにおける「歌う行為」を、子どもと養育者の双方向の関係性の中で捉え、これまでの先行研究では具体的に明らかにされてこなかった養育者側にとっての「歌う行為」の機能や役割に焦点を当て、その可能性について検討する。特に子育てにおける「歌う行為」を取り上げる有用性として、筆者らは次のような仮説を立てた。①歌(歌う行為)は短時間で見通しが持ちやすく、歌い終えることで区切りがつけやすいため、気軽に行なうことのできる養育行動として位置付けられるのではないかと、②リズムや拍や節といった音楽的な表現により言葉だけでは表現しきれない複合的な意味合いを出せるため、「歌う行為」が子どもとの感覚的な共感性を生み易くし、養育者の子育て上のネガティブな心情を好転させることにつながるのではないかと、という2点である。これらの仮説が支持されれば、子育てにおける「歌う行為」の可能性が拓かれるのではないだろうか。

なお、本研究での「歌う行為」とは、既存の楽曲のみならず、つくり歌や替え歌、擬音語・擬態語等によるリズムや節を付した即興的な音声表現を含む。

II 研究の方法

1 調査の概要

(1) 対象

修学前の子どもを持つ母親3名

A: 子ども1人(0歳10ヶ月)

B: 子ども2人(6歳0ヶ月, 1歳4ヶ月)

C: 子ども3人(4歳9ヶ月, 2歳7ヶ月, 0歳9ヶ月)

(2) 調査機関

2019年9月(インタビュー調査は2019年9月21日に実施)

(3) 調査方法

1) 質問紙調査

子どもの人数や年齢, 職種等に加え, インタビュー内容に関わる「歌う行為」に関する設問 10 項目 (表 1), 4 件法 (4: 大変あてはまる, 3: あてはまる, 2: あまりあてはまらない, 1: 全くあてはまらない) とした。併せて, 歌の種類や場面については, 自由記述欄を設けた。また, 「歌う行為」前後の感情状態を比較検討するため, 寺崎ら (1992) による「多面的感情状態尺度」から選出した 50 項目, 4 件法 (4: 大変あてはまる, 3: あてはまる, 2: あまりあてはまらない, 1: 全くあてはまらない) を設定した。

2) インタビュー調査

3名の母親と筆者ら 2名によるグループインタビュー形式を採用した。筆者らから, 事前の質問紙調査の設問に沿ってより詳細な回答を求めること, また自由に発言して良いことを伝え, 実施した (調査時間は約 70 分)。

表 1: 「歌う行為」に関する設問 10 項目の内容

設問 1	歌は好きですか
設問 2	歌は得意ですか
設問 3	自身が子供の頃によく歌ってもらいましたか
設問 4	子育て中に子供によく歌を歌いかけますか
設問 5	子育て中に子供と一緒によく歌を歌いますか
設問 6	子育て中の以下の各場面でどれぐらい歌を歌いますか。またそれはどんな歌ですか。 (1) 寝かせる時 (2) なだめる時 (3) 遊ぶとき (4) その他の歌う場面 (具体的に:)
設問 7	寝かせるとき、歌うとよく眠る
設問 8	なだめる時、歌うと機嫌が良くなる
設問 9	遊ぶ時、歌うと喜ぶ
設問 10	その他、歌うと子供が喜ぶなど効果的だと感じる場面を教えてください。

(4) 倫理的配慮

調査の実施に際しては, 事前に紙面及び口頭により, 研究の目的や内容, 調査方法について説明した。調査への協力については, 回答の有無は自由であること, 調査への協力はいつでも辞退できること, また回答しなかったり調査協力を辞退したりしても不利益を被ることがないこと, さらに調査したデータは厳重に管理し研究終了後は速やかに破棄すること, 個人情報を守秘することを伝え, 同意 (承諾) を得た者に対して, 調査を実施した。

III 結果及び考察

1 養育者の歌への意識

質問紙調査によって, 3名の母親のうち2名が「歌が好き」に肯定的な回答, 1名のみが否定的な回答を示した。この回答に連動して, 2名が「歌が得意」と回答し, 1名は「得意でない」と回答した。上記の歌への意識にかかわらず, 3名全てが「自身が子供の頃によく歌ってもらっていた」と認識していた。そして, 「子育て中に子どもによく歌いかけますか」との質問に対して, 3名全

てが「歌いかける」と回答。「子育て中に子どもと一緒によく歌を歌いますか」という質問に対しても、0歳児で歌うことがまだ難しい子どもをもつ母親以外は、「歌う」と回答した。

今回の被調査者である母親らは、すべて大学で音楽教育を専攻していたため、もともと音楽や歌への親和性が高いとも捉えられるが、インタビュー調査からは、養育者自身の幼少期における歌との触れ合いが、養育者への歌への意識に影響を与えているのではないかと考えられた。例えば、表2および表3に示したように、母親Aは、自分の母親はいつも歌う存在で、その内容についても替え歌であったり効果音的な音声表現であったりと即興的に歌ってくれていたと語る。また、母親Cは古い童謡や季節の歌などを中心に、祖父母や音楽好きな両親から、浴びるように歌ってもらった記憶がある。母親Aや母親Cにとっては、自身の母親や家族が歌ってくれた具体的な像を思い出すことができるぐらいの体験がある。一方で、母親Bは「童謡などは歌ってくれていた」と歌ってくれていた記憶はあるが、その具体については積極的な回答は得られなかった。

このように、3名ともに「よく歌ってもらっていた」との回答があったが、実際には幼少期の歌との触れ合いの程度や内容は様々で、子育てにおける「歌う行為」の実際においても、自身がしてもらった子育て（歌う行為）を再現する形で見られる点が多いことが示唆された。

表2 設問3「自身が子どもの頃によく歌ってもらっていた」
についての語り

母親A	自分の親が替え歌ばかり歌っていた(その影響を受けていると感じる)。親が歌ってくれていたから自分もそうしようではなく、自然と出る。お母さんはいつも歌うものだ、変な歌を歌っている存在だという感じはあった。
母親B	童謡などを歌ってくれていた。
母親C	二世帯で暮らしていたため、おじいちゃん、おばあちゃんにもよく歌ってもらっていた。おばあちゃんは、古い童謡を端から順に歌ってくれるような人。両親も音楽をやっているのだから、季節や事象に合った歌などをよく歌ってくれたし、孫にも歌ってくれている。

表3 設問4・5「子育て中に子どもによく歌いかける/一緒に歌う」
についての語り

母親A	機嫌がいい時に歌ったり、子どもに何かするときに歌ったりする。自作の鼻歌や即興で適当に歌うことも多い。何かの歌の節を使って、替え歌で歌うこともある。
母親B	歌うことはあまり好きではないし、苦手意識があるが、子供と一緒に歌うときは気にしていない。上の子が0歳の時は「ゆりかごの歌」のCDをかけながら歌っていた。童謡のCDをかけることが多い。保育園で歌ってきた歌(AKBなどJ-pop)をお風呂で一緒に歌ったりする。2~3歳の頃は、童謡や手遊び歌と一緒に歌っていた。
母親C	車の中などで、童謡や手遊び歌のCDをかけて歌うことが多い。家では、好きなアーティストのDVDをかけて、抱っこしながら歌ったりすることもある。子どもから一緒に歌おうと誘ってくる。歌のリクエストもある。一緒に歌わないといけない時と、一緒に歌ってはいけない時(聴いて欲しい時)の2パターンがある。

2 養育者が「歌う行為」を用いる場面および歌の特徴

(1) 日常の養育場面における「歌う行為」の質的検討

日常の養育に「歌う行為」を用いる場面として、主に以下の3場面を取り上げて質問を行った。

1) 寝かせる時

質問紙調査によって寝かせる時によく歌うと答えたのは、3名中1名のみで2名の母親はあまり歌わないと回答した。「子守歌」に代表されるように、寝かせる時に歌を用いることが多いという想定を覆す回答であった。また、表4に示したようにインタビュー調査からは、子どもの気持ちを穏やかにリラックスさせる効果を狙っていること、それは寝かせるための歌いかけ（子守歌）ではなく、あくまでも寝るムード作りのためであること、また母親自身が穏やかな気持ちになるために用いていることが示された。歌の特徴に関しては、子守歌や童謡等、比較的テンポやリズムのゆったりした楽曲や繰り返して歌うことのできる楽曲を選択し、また母親自身もゆったり歌いかけているとの回答があった。

表4 「寝かせる時」の歌う行為についての語り

	歌う場面の状況
母親 A	<p>寝かせる時はこの歌！というより、歌いやすかったからずっとこの歌、という感じ。「大きな古時計」はエンドレスでずっと歌える歌だから。案外、子守唄は短いので、どうしても長く歌い続けられる歌として、ずっと歌って。寝ない時には、自分がイライラしているのを紛らわすためにも歌っている。歌っていたら寝る。歌っても寝なかったら、諦めて抱っこしたりとか。歌って寝かせる時は、抱っこしないでトントンしながら、寝かせている。</p> <p>自分も穏やかな気持ちで歌っている。 「歌うとよく眠る」？うーん・・・どちなのかなあ。なんか眠れそうな時は、眠れそうだから、歌って寝るのか、..、眠らない時は、本当に何をしても眠らないので、眠れる状態だから歌ったら寝ている、みたいな、もしかしたら(そっちの方が)強いかもしれない。 歌が決め手で眠ることは絶対にはないので、雰囲気づくりで使って、..、という感じ。最終兵器にはならないんですけど。寝る雰囲気作りには、一役買っている。</p>
母親 B	<p>寝かせる時は、基本的にお布団でトントン。寝る気がない時に、眠りモードに入れるために抱っこすることはあるけど、寝る気分になってきたら、もう(お布団に)置いて。抱っこでしか眠れなくなったら嫌だから。</p> <p>上の子はまだ起きてて、下の子を先に寝かせるって感じなんだけど、バタバタバタバタって夕飯の時間が終わって、寝かせる時間が自分の癒しの時間というか、上のお姉ちゃんが口も達者だし、女子だし、なかなかじゃない。久しぶりの赤ちゃんで、癒しの存在になっているから、自分も一緒に落ち着けられる。</p>
母親 C	<p>基本的に歌わない。ぴっと電気を消して「おやすみ」と言って寝る。お昼寝とか、寝にくい時は確かに歌うけど、寝かしつけというかこっちの都合で寝て欲しい時には歌う。子守唄のつもりで「ゆりかごの歌」を歌っている。「ゆりかごの歌」は寝かせる時以外は、歌わない。歌詞が4番まであるから、4番までいけば寝るので。</p> <p>うちは、反対に、3人まとめて寝かせるので。今、一番上の女の子は、寝る前に昔話を聞かせて欲しいというのが習慣になっていて、今日は「かぐや姫」みたいな。その話をしないといけないので、あんまり短いと怒られるので、それを話してよしよしと終わる頃には、2番目の子は寝ていて、下の子もトトロして、一番上の子が寝ていなくても、「ゆりかごの歌」歌ったら、お母さんは寝てなくても、下でお片づけに行く</p>

	からね、と言って「ゆりかごの歌」を4番まで歌ってやって、一番下の子は眠る。一番上の子はまだ起きてるけど、目を閉じて寝ときなさいと言って、3人で寝室で先寝始めて、私は下(1階)に洗い物や洗濯物とかの家事をしに下りる。(ゆりかごの歌が)合図というか、ここまで歌ったらもうおしまい、みたいな。落ち着いてゆったりというよりも、これでおしまいっていうエンディングテーマじゃないけど、ここまでは一緒にいるからって感じで、歌っている。寝かせる時に歌っているという感覚ではないので、「寝かせる時に歌う」(の質問項目)は、当てはまらないにしたいんですけど。
--	---

2) なだめる時

質問紙調査によってなだめる時によく歌うと答えたのは1名のみで、2名の母親はほとんど歌わないと回答した。表5に示したように、歌うと答えた母親Aは、即興的な音声表現を使っていることがわかる。

一方、母親B及びCは、歌ではなく声掛けや言葉で伝えていると回答した。このことから、特に0歳児の母親Aにとっては言葉でそのまま伝える代わりに、効果音や即興的な作り歌によって子どもの気持ちの切り替えを図ろうとしているのではないかと考えられた。

表5 「なだめる時」の歌う行為についての語り

	歌う場面の状況
母親A	声掛けとかが全て歌になっている感じ。自作の歌と言っても、歌と言えない、ただの効果音のような。子どもの気分を盛り上げようとして歌っている気がする。 こっちが泣きやませよう、落ち着かせようとして、変な音を出してみたりとか、そんな方が強い。
母親B	抱っこして、よしよしと言うぐらいで、歌は歌わない。
母親C	(なだめる時は、言い聞かせる感じ?) うーん、あんまり(子どもが)泣かない。

3) 遊びの時

3名の母親共に、遊びの場面でよく歌を歌っていることが回答から読み取れた。特に、「手遊び」をしながら歌ったりするなど歌うことそのものが遊びになっているものを用いている場合が多い。また、遊びに関連した楽曲を選択して歌いかけたり、一緒に歌ったりする等、遊びの場をより楽しく盛り上げたり、一緒に遊びを共有するための手立てとして用いていることがわかる。さらに、実際には遊びの行為自体を一緒に行なっていなくても、母親Cの「歌を歌えば、一緒に遊んでくれている感が子どもにある」や「構ってやれなくても、声だけで一緒に遊んでやれる」のように、子ども達が遊んでいる周りでBGM的に歌うことで、母親がその遊びに参加している状況を作り出し子どもとの共有体験を生起させる手立てとなり得ることも示唆された。

表6 「遊びの時」の歌う行為についての語り

	歌う場面の状況
母親A	遊ぶ時は、基本一人で遊んでいて、こっちが整ったら、一緒に「バスに乗って」とかさろそろやろうかな、という感じ。(一人で)遊んでくれたら、もう手を離したいので、一人で遊んでいたらすっと放っておいて、気が向いたり、こっちに求めてき出したら、一緒に手遊びとかをする感じ。べったりではなくて手を離す感じにいる。

母親 B	歌だけで喜んでるのか、歌遊びが多いから。遊んでいること自体に喜んでる。歌を聞いて喜んでるよりも・・・
母親 C	<p>3人もいるので、遊んでいる時に関わってやらないと、関わってやる時間がないから。遊び出したら、一緒に遊んでやろうか、みたいな重い腰を上げる感じで遊ぶ。私が家事をしていない時には、なるべく一緒にいて、一緒に遊んでやろうと思っていて。ただただ遊ぶだけだったら、こっちも疲れるので、お絵描きしている間は、横で書いたら怒られるし、手を出すと怒られるから、見ながら「どんな色が好き」とか歌いながら、描いているのを見守る。アンパンマンのパズルをしている間は、延々アンパンマンマーチをリピートして(ママ BGM?)。もうアンパンマン飽きたというと、それに合わせて他の曲を歌ったりする。ごっこ遊びを初めて、最近上の子がプリンセスにはまっているので、水色のワンピースを着ている時にはエルサになるので、「ありのままの。。。」を歌ってと言われて、歌ったりとか。ラプンチェルになると、ラプンツェルの中の曲を歌ったりとか。物理的な距離としては様々で、膝の上でお絵かきをしている状態で歌ってあげるときもあれば、エルサになっている娘に、隣の部屋で料理をしながら歌うこともある。「今はちっさいエルサだから」と言われたら、「雪だるま作ろう」の方を歌う。おままごととして料理を作っている時は、「お母さんの歌」を子どもも替え歌しながら一緒に歌う。</p> <p>一緒に遊んでくれてる感があるのか、満足してくれる。 歌を介する遊びは、1歳未満から2歳になるかならないかぐらいまで、たくさんあるから、こっちも遊びやすいし。</p>

4) その他の場面

上記の3つの場面以外でよく歌う場면을尋ねたところ、表7に示したように、起きた時や散歩の時等、日常生活の決められたルーティンを行う際の合図または象徴として機能していることが回答から読み取れた。また、オムツ替えの時、ハミガキの時、お風呂やトイレ、苦手なものを食べる時など、気分転換が必要な時に用いていることも示された。特に嫌なことから注意を逸らさせたり、気持ちを切り替えたりする時には、効果的に用いられていることが示唆された。

表7 その他によく歌う場面についての語り

	歌う場面の状況
母親 A	<p>朝起きた時： 「ととけっこう よがあけた」(絵本の中のわらべ歌)毎朝のルーティン。起きかけの歌だから、名前のあるところに自分の子どもの名前を入れて歌っている。朝起きているのを見たら、歌っている。</p> <p>オムツ替え、歯磨きの時： 喜ぶという語弊があるかもしれないけれど、嫌がっていても、歌ったら、ちょっと気分が乗ってくるかなあという感じ。気晴らしみたいな。嫌なことから注意をそらし、歌に注意を向ける方が強いかもしれない。</p>
母親 B	特になし
母親 C	<p>お迎え(散歩)の時： 上の子のお迎えに行く時に歌う。春は「ちゅうりっぷ」や「ちょうちょう」も歌ってみたり、反応が良くなかったけど「おぼろ月夜」とか。菜の花菜の花というから。とりあえず、目に見えるものを歌ってやって、気を紛らわしながら 15分ほど歩かないといけないので・・・</p> <p>お風呂、トイレ、苦手なものを食べる時、少し勇気や気持ちの切り替えが必要な時、順番を代わる時： 気持ちの切り替えが下手なので、そういう時とに歌う。トイレに行く時は、「トットトイレ」とかを徐々に速く歌いながら連れて行ったりとか、お風呂は、出たくない時に、「今日は何の歌でおしまいにする?」と言って歌ったり(区切りをつける時に歌っている)。</p>

(2) 子どもの発達度と「歌う行為」の質的検討

今回の被調査者は1児～3児の母親で、すべて就学前児をもつ母親であったが、子どもの言葉の理解度、つまり言葉の発達の程度に応じて、養育時に選択する楽曲に違いがある傾向が示唆された。母親が意図をもって子育てに「歌う行為」を用いるに際して、「歌」に付与される歌詞に母親の意図を重ねる場合は、母親によって理解可能な言葉で構成されていると判断された曲目が選択されていると推察された。

一方、言葉の理解に至っていない発達段階である0歳児に対しては、歌詞を伴わない、子どもの動きを擬態語にしたような即興的な「歌う行為」の実践が多く認められた。その「歌う行為」に強弱や高低、遅速等で音声表現を多様にするによって、言葉の意味を以て理解出来ない部分を補足する機能を持たせたり、感情に直接揺さぶりをかけたりしているように捉えられた。

(3) 歌う内容の質的検討

前述したように、養育における「歌う行為」としての選曲では、あくまでも子どもの視点で、子守歌、童謡、手遊び歌、季節の歌、子ども向けの愛唱歌等が多いことも示された。また、動きやイメージに合わせた効果音的な音声表現や、既存の楽曲を繰り返したり、変奏させたり、替え歌にしたり等、場や子どもの状況に合わせた即興的な音声表現も多用されていることが明らかとなった。

一方で、3名の母親は、いずれも好きな歌手やアーティストがいるとのことであったが、自分の好きな楽曲を子どもと共有しようとする意向は認められなかった。むしろ、そうした自分自身の好きな音楽は、母親としての自分から離れ、私という個に戻り、自主的に過ごす時間や空間で自らを開放する際の手立てとして用いられることも分かった。

3 「歌う行為」前後の感情状態の比較

当比較については、データ数が少ないため、統計処理を施さず、事前事後の個人内評定値の差からその特徴を分析し、傾向を捉えた。

表8に示したように、3名の母親に共通して認められた「歌う行為」による感情の肯定的な変化項目は、「5 快調な」、「20 ゆるんだ」であった。いずれも、「歌う行為」により、子どもとの関係の質が好転し、緊張関係がほぐれた様子が窺われた。前述したように、「歌う行為」は、それを介して子どもの好転的な変化をもたらす作用や、環境をより楽しいものにする手段として有用であったことから示唆される。

加えて、例えば母親Aの「自分がイライラしているのを紛らわすためにも歌っている」や、母親Bの「自分の癒しの時間として」というインタビューの語りからも読み取れるように、「歌う行為」自体が母親自身の感情を好転させる有用性も見出された。

また、遊びの際にも、その遊びに応じた楽曲を選択して歌いかけたり、一緒に歌ったりすることにより、子どもの感情が落ち着いたり、高揚したりする姿

に接し、養育者との間に「1. 活気のある」と感じたり、「歌う行為」の前よりも養育者自身に「6. 気持ちの良い」や「10. さわやかな」感情が高まる傾向も示された。インタビューからも、「歌う行為」が、楽しい場面を盛り上げたり活性化したりするような効果音的な役割や雰囲気づくりの一要素として有用であることが読み取れた。

表 8 母親自身の「歌う行為」前後の感情状態の比較

感情状態の項目	母親 A		母親 B		母親 C	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
1. 活気のある	1	3	2	2	3	4
2. 元気いっぱいの	1	1	2	2	3	4
3. 氣力に満ちた	1	1	2	2	3	4
4. はつらつとした	1	1	2	2	3	4
5. 快調な	1	3	2	3	3	4
6. 気持ちの良い	1	3	3	3	3	4
7. 快適な	1	1	2	3	3	4
8. 機嫌のよい	4	3	3	4	3	4
9. 陽気な	3	3	3	4	3	4
10. さわやかな	1	3	3	3	3	4
11. のんびりした	3	3	4	4	3	3
12. ゆくりした	3	3	4	4	2	3
13. のどかな	3	3	4	4	2	3
14. おっとりした	1	3	4	4	2	2
15. のんきな	1	3	2	3	2	2
16. やわらいだ	1	1	4	4	3	4
17. 平静な	3	3	2	2	3	2
18. 気長な	4	3	2	2	3	2
19. ゆったりした	3	3	4	4	2	3
20. ゆるんだ	1	3	3	4	2	3
21. いとおい	3	4	4	4	4	4
22. 愛らしい	3	4	4	4	4	4
23. 恋しい	1	1	2	3	4	4
24. すてきな	1	1	2	3	4	4
25. 好きな	1	1	2	3	4	4
26. かれんな	1	1	2	2	2	2
27. あこがれた	1	1	1	2	2	2

28. うっとりした	1	1	2	3	2	2
29. かわいらしい	3	4	3	3	2	2
30. 情け深い	1	1	1	1	2	2
31. つまらない	2	1	1	1	2	1
32. 不機嫌な	2	1	1	1	2	1
33. ばからしい	1	1	1	1	1	1
34. 疲れた	2	3	1	1	1	1
35. 退屈な	3	1	1	1	1	1
36. だるい	1	1	1	1	1	1
37. 無気力な	1	1	1	1	1	1
38. ぼんやりした	1	1	2	1	2	1
39. ぼやぼやした	1	1	1	1	2	1
40. 無関心な	1	1	1	1	2	1
41. 敵意のある	1	1	1	1	1	1
42. 攻撃的な	1	1	1	1	1	1
43. 憎らしい	1	1	1	1	1	1
44. 挑戦的な	1	1	1	1	1	1
45. うらんだ	1	1	1	1	1	1
46. むっとした	1	1	1	1	1	1
47. かつとした	1	1	1	1	1	1
48. おこった	1	1	1	1	1	1
49. 気分を害した	1	1	1	1	1	1
50. むしゃくしゃした	1	1	1	1	1	1

4 総合考察

3名の母親の回答を分析した結果、子育てにおける「歌う行為」は「分離型」と「共有型」の2種類に大別できた。

まず、母親Aの回答からは、自身の母親がよく即興で作り歌を歌っていたことから、母親A自身も自然に作り歌を歌ったり、育児行為に擬音語や擬態語など効果音的な音声表現を取り入れたりしながら、「歌う行為」によって育児そのものを楽しんでいる様子が読み取れた。子どもが0歳児で言語理解が未熟であるせいか、子どもとのコミュニケーション手段として、歌詞のある歌よりも擬音語や擬態語を多用し、声色の変化やリズムを付随させていた。このような「歌う行為」は、心情に働きかける効果をもたらすものと推察された。「歌う」こと自体がコミュニケーションの中で自然と生起し、母親の中で特別なものとして意識化されずに用いられている点に特徴がある。また、こうした音声表現でもって、子どもと母親とが在る「場」自体の様態を表現し、子どもとその「場」

を共有している点から、「共有型」と命名した。

母親Bの回答からは、歌があまり得意ではないとの自己評価が認められた一方、子どもに歌を歌うのは子どものためであると考え、「歌う行為」を用いていることが分かった。また、他の母親AおよびCと異なって、子どもに負の感情が生起している時には歌わず、子どもも自身ものんびり、ゆったりとした感情状態の時に「歌う行為」を用いることも特徴的であった。さらに、自身の好きな歌は、子どものいない車の中で気分転換に聴いたり歌ったりしていること、育児行為としての「歌う行為」は、子どものためと割り切り、母親は歌いかけの人、子どもは聴く人・歌ってもらう人のように、それぞれ別個の役割を担うという点が特徴的であると捉えられたことから、「分離型」と命名した。

母親Cの回答からは、自身の幼少期の経験から歌が好きで、歌を子育てにふんだんに取り入れていること、そしてそれは、子育てに変化をつけたり、場をより楽しく彩りを付加したりするために用いていることが分かった。また、子どもの負の感情に対して気分転換のために歌を用いるなど、歌の効果を意識的に養育行動に取り入れている点、歌の内容（歌詞）を「場」に調和させて用いている点も特徴として挙げられた。何よりも、「歌う行為」を養育者自身が楽しみ、その楽しさを子どもと共有していると判断されたことから、「共有型」に分類した。

IV まとめと今後の課題

冒頭に述べたように、子育てにおける「歌う行為」を取り上げる有用性として、筆者らは次のような仮説を立てて検討した。

- ①歌（歌う行為）は短時間で見通しが持ちやすく、歌い終えることで区切りがつけやすいため、気軽に行なうことのできる養育行動として位置付けられるのではないか。
- ②リズムや拍や節といった音楽的な表現により言葉だけでは表現しきれない複合的な意味合いを出せるため、「歌う行為」が子どもとの感覚的な共感性を生み易くし、養育者の子育て上のネガティブな心情を好転させることにつながるのではないか。

これらの仮説に対して、インタビュー調査より、「歌う行為」には、子どもをある行動へ向かわせるための意欲を高めたり、負の感情を好転させたりする感情の切り替え手段としての有用性が示唆された。言葉だけで伝えるよりも、子どもの好きな歌や多様な音声表現を用いることによって子どもに受け入れられやすいことや、音楽的な特性自体が子どもの感情に響きやすいことが示された。また、「歌う行為」には、了解可能なメッセージを共有し、親子が楽しく養育行動を進める触媒と成り得る可能性も見出された。こうした「場」やメッセージを共有できる効果によって、子どもだけでなく、養育者自身の心情をも好転させ、養育行動に伴う時間や関係性がより豊かに循環していくのではないかと推

察された。

今回はパイロットスタディとして3名の母親の事例分析にとどまったが、今後はさらに事例数を増やし、今回示唆された養育者にとっての「歌う行為」の可能性を検証していくことを課題としたい。

引用・参考文献

- ・今川恭子・山田栞里(2017)「乳児と養育者の『会話』におけるマザリーズ-ラプソディの分析から見える音楽性」,『音楽教育実践ジャーナル』vol. 15, pp. 76-84, 日本音楽教育学会
- ・黒石純子・梶川祥世(2008)「現代の家庭育児における子守歌の機能-0~35か月児に対する母親の肉声による歌いかけとオーディオ等による音楽利用の比較検討-」,『小児保健研究』67(5), pp. 714-728, 日本小児保健協会
- ・Malloch, S. & Trevarthen, C. (2009). *Communicative Musicality: Exploring the Basis of Human Companionship*. Oxford University Press.
(邦訳:根ヶ山光一・今川恭子・蒲谷慎介・志村洋子・羽石英里・丸山慎監訳(2018)『絆の音楽性—つながりの基盤を求めて』, 音楽之友社)
- ・松田佳尚(2014)「対乳児発話(マザリーズ)を処理する親の脳活動と経験変化」,『ベビーサイエンス』14, pp22-33, 日本赤ちゃん学会
- ・諸岡由依・小花和 Wright 尚子(2016)「子どもへの歌いかけと母親の育児自己効力感の関連」,『小児保健研究』75(5), pp552-558, 日本小児保健協会
- ・内閣府(2019)「男女共同参画白書 令和元年版」
http://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/r01/zentai/html/honpen/b1_s03_02.html (2019年12月20日閲覧)
- ・佐伯胖(2007)『共感-育ち合う保育の中で』, ミネルヴァ書房
- ・吉永早苗, 無藤 隆(2012)「育児における「語りかけ」, 「歌いかけ」の大切さ—養育者・保育者と乳幼児間の音声相互作用の視点から—」, 『思春期青年期精神医学』21, pp110-124, 日本思春期青年期精神医学会

註

本稿は、2019年10月19日の日本音楽教育学会第50回大会でポスター発表した内容について早川・片山で再検討し執筆したものである。

The potential of “singing activities” in child-rearing facilitated by care-givers: A focus on three mothers

Rinko HAYAKAWA*1, Mika KATAYAMA*1

The purpose of the present study was to examine the potential of “singing activities” in child-rearing, facilitated by care-givers, from the perspective of the care-givers. A pilot study constituted a survey and group interviews of three mothers currently involved in child-rearing. The effect of mothers’ singing activities on child-rearing was considered in various contexts. The results suggested that singing activities have the potential to increase motivation of children to take the initiative in certain behaviors or in altering children’ s negative mood to a positive focus. Rather than solely relying on words to influence children, they are more likely to respond, accept, and eventually embrace a message conveyed through their favorite songs or diverse vocal expressions. In short, messages conveyed through singing activities are more likely to resonate with children’ s emotions. Furthermore, singing activities could work as a catalyst for fun-filled and enjoyable growth for both care-givers and children in the process of child-rearing and development by allowing them to share intelligible messages with each other.

Keywords: singing activities, care-givers, child-rearing, survey, group interview survey

*1 Graduate School of Education, Okayama University
